

論文

「森の民」に関する覚書
—モンゴル帝国支配下のシベリア—

A Note on the “Forest People”
Siberia under the Mongol Empire

安 木 新一郎
YASUKI Shinichiro

抄録

「森の民」の中には集団名がその居住する河川名によるものがあり、モンゴル高原と同じく、チョルゲ（漢語では路）という流域ごとに集団を把握するという統治手法が採られていたことがわかる。また、地名をチュルク語で表しており、シベリア統治においてリングフランカ（族際共通語）、あるいは行政用にチュルク語が使われていたか、もしくはサモエード語話者のチュルク語への移行が見られる。さらに、ジョチ朝・シビル国の影響はエニセイ河中下流域にまで及んでおり、のちにロシアはシビル国が利用してきたイルティシュ、オビ、エニセイ河流域の既存の河川網を伝って侵略し、各地でヤサク（毛皮税）を取り立てることができたと考えられる。参考書や資料集に載せられたモンゴル帝国の版図を表す地図では、元朝やジョチ朝の範囲がシベリアの真ん中あたりまでとなっているものが多い。しかしながら、『元朝秘史』の記述を前提とするならば、14世紀第1四半期の元朝の版図はエニセイ河とアンガラ河の合流域より南までで、西シベリアおよびエニセイ河口域にいたる北極圏はジョチ朝の版図となる。

キーワード：モンゴル、シベリア、「森の民」、ロシア

1. どうしてロシアは広いのか

なぜロシア（モスクワ大公国）は16世紀末にシビル国（シビル・ハン国）を滅ぼし、その後ベーリング海峡を越えてアラスカ、カリフォルニアにまで進出したのかという問いに対しては、白海を通じたイギリスとの交易が始まり、輸出品としての毛皮需要が増えたことで、毛皮の産地への進出が促されたからと答えることができる。¹

これに対して、なぜたった50年余りで広大なシベリアを征服できたのかについては、銃火器の使用というロシア側の要因[田辺 2011][佐々木 2019]と、寒冷化に起因した13世紀後半以降の農業生産の衰退あるいは消滅[三上 1957]というシベリア側の要因が考えられる。

これらに加え、13世紀からモンゴル帝国、中でもトルイ家とジョチ家がシベリアを支配し、人口調査と集団の形成（十・百・千・万という10進数による単位）、およびこれらに基づく貢税の徴収といった統治体系が持ち込まれ、後に登場したロシアは既存の体系にしたがって地元の首長と関係を結び、ヤサク（毛皮税）などを手に入れることができたのが重要だと思われる。支配下に置いた集団を先兵として隣接する他の集団を征服するという方法もモンゴルと同じである。

ロシアがシベリアを短期間で征服できた理由を考えるためには、先行するモンゴル帝国によるシベリア統治の実態について見ていく必要がある。

しかしながら、モンゴル帝国期のシベリアについては、資料に現れる各部族がどこに居住していたのかいまだ曖昧なままである。また、シベリアにおける元朝とジョチ朝（キプチャク＝ハン国）との境界がどのあたりだったのかというようなことは、資料集やハンドブックに載せられる研究以前の基礎的なものだと思うが、今一度確認しておきたい。

本稿では、『秘史』に挙げられた「森の民」17集団について、現在ロシアで使われているシベリアの地名がモンゴル帝国期と大きく変わっていないと仮定して、各集団のいた地域を推定する。「森の民」については村上訳注[1976]、宇野[1985]という先行研究があるが、ソ連解体後に誰でも手に入れられるようになったシベリアの地図を見ることで、先行研究においてあいまいだった点について再

1 ロシアと毛皮の関係については森永[2008]を参照。

考する²。

2. 「森の民」17 集団

『秘史』には「森の民 hoi-yin irgen」[宇野 1985]として以下の17の集団が挙げられている。①オイラト、②ブリヤト、③バルグ、④ウルスト、⑤カプカナス、⑥カンガス、⑦トゥバス、⑧キルギス、⑨シビル、⑩ケスディイム、⑪バイト、⑫トゥカス、⑬テンレク (テレグ)、⑭トエロス (トエレス)、⑮タス、⑯バジギト、⑰コリトマトであるが、⑰コリトマトはトマトとも書かれる。以下、『秘史』に出てくる集団名に番号を振り、他の史料にもある場合はその番号を示す。なお、集団名の日本語表記は原則、小澤訳 [1997] による。

『聖武親征録』には火因亦児干 (ホイン・イルゲン) として、烏思 (オシ)、⑤憾哈納思 (カプカナス)、⑬帖良兀 (テレングト)、⑩克失的迷 (ケステミ) の4部族が登場する [宇野 1985]。

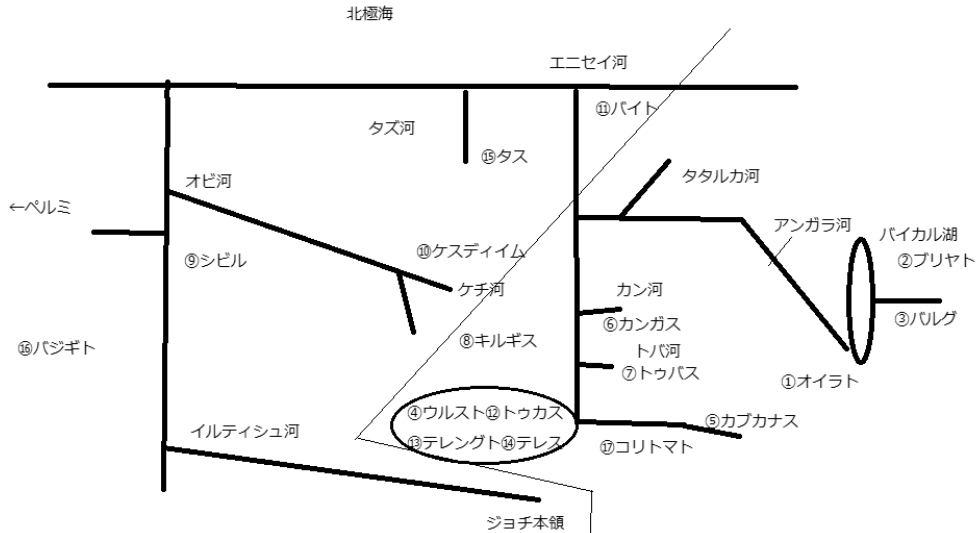
また、『元史』には「森の民」にあたる語彙はないが、巻63地理志6西北地附録に、⑧吉利吉思 (キルギス)、昂可刺 (アンガラ)、烏斯 (オシ)、⑤撼合納 (カプカナ)、益蘭 (イラン) の諸地域が並んでいる。兀速 (オシ)・⑤愍哈納思 (カプカナス)・⑧乞里吉思 (キルギス) 三部 (『元史』、志11、地理2。列伝56、劉哈刺八都魯伝) といった表記も見られる。

『集史』では④ウラスト、⑩クシュテミ、⑬テレンクートと、森のウリャンカト、タイチウト、ネクン・タイシの子孫を「森の民」に含めている。タイチウトとネクン・タイシの子孫というのはモンゴル部族なのでタイガの原住民ではない [宇野 1985]。また、①オイラト、③バルクト、⑧キルギス、⑨イビル・シビル、⑭トラスは『集史』では「森の民」には含まれないが説明の載っている部族である。さらに、⑰コリとトマトに関する記載もある。

以下では、『秘史』に登場する「森の民」17集団についてそれぞれ見ていく。

2 使用する地図は、Красноярский край, Республика Хакасия, атлас-путеводитель для автомобилистов и туристов, рыболовов и охотников, ООО ИД Знаки времени К, №4(44), 2007г.

図 「森の民」 概略図



① オイラト

『集史』の分類では、「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つである。オイラトはケム河一帯の「八河地方」に住み数部族に分かれていた。

『秘史』では、酉の年（1201年）にジャダラン氏族のジャムカ³をグル・カンあるいはカー⁴に推戴し、ケレイト部族長のオン・カンおよびテムジンと敵対した11の集団の一つとして、オイラト部族とその族長であるクドカ・ベキが登場する〔秘史：§ 141〕。金朝派の長であるオン・カンに対抗すべく、ジャムカはグル・カン、すなわち西遼（カラキタイ）派の指導者となったと考えられることから〔松田 2015〕、オイラト部族はもともと西遼に属していたと思われる。

テムジン、のちのチンギス・カンはず 1205年に西夏を攻め、1206年の大モンゴル国建国後も金朝に従うことで南と東の国境を安全にすると、1207年にモンゴル高原の北西方面への遠征をおこなった。1207年にジョチは右翼の軍を

3 ジャムカはドーソン（田中訳）[1936] および安田 [2017] によると、より中世モンゴル語の発音に近い表記をするとジャムーカとなる。

4 カーは契丹語で、モンゴル語のカンと同じ意味〔小澤訳 1997 : 170-171〕。

与えられ、ブカ、おそらくウリヤンカト部族出身のイエス・ブカ・タイシを道案内として「森の民」の地に向かい、オイラト部族長クドカ・ベキの協力もあって多くの「森の民」を従えることができた。チンギス・カンには戦わずに「森の民」を仲間に加えたジョチの功績をたたえ、「森の民」の一部を民草（部民）として分け与えた〔秘史：§ 239〕。ちなみにバトの征西（1236年～1242年）ではジョチ家当主バトとウリヤンカト部族のスベエテイ・バートルが総司令官であり、司令官の出身部族の点で「森の民」遠征と共通性が見られる。

クドカ・ベキはオイラト万人隊の保持を認められ、2人の子トレルチとイナルチにそれぞれチンギス・カンとジョチの娘が与えられた〔秘史：§ 239〕。その後、コリトマト部族が反乱を起こすと、右翼のボロクル、「森の民」万人長コルチ、クドカ・ベキに鎮圧を命じたが、ボロクルは戦死し、あらためてドルベイ・ドクシンを司令官とする軍を派遣してトマト部族を平らげ、コリトマト部族を率いていたボトクイ・タルクン（女性）はクドカ・ベキに与えられた〔秘史：§ 240〕。

一方、『集史』によると、チンギス・カンは1206年の即位後、南方の西夏や北方のキルギスへ出兵してから、1208年にナイマン部族のブイルク・カンのもとに逃げたメルキト部族のトクトアとナイマン部族のクチュルク（ブイルク・カンの甥）の後を追った。その途中、クドカ・ベキが下ってきたので道案内をさせ、背後からトクトアとクチュルクの根拠地を襲い、トクトアは戦死しクチュルクは西遼へ逃げた。その後、1218年にトマト部族が反乱を起こすと、モンゴルはキルギス部族に出兵を命じたが拒否され、ジョチ軍を北方に派遣した。なお、オイラト部族はトルイの継承した中軍の右翼14番目の千人隊となっており、4個の千人隊（ドルベン・オイラト）からなっていた〔川本2013：83〕。

このように『集史』と『秘史』ではオイラト部族の服属の経緯について異なった記述となっているが、1206年のチンギス・カン即位の後しばらくしてオイラトがその傘下に入ったことと、ジョチがオイラトを含む「森の民」と深い関係があったことは共通している。

オイラト部族長家はチンギス・カン家と婚姻関係を幾重にも結ぶことで勢力を拡大したことで知られる〔岡田1974〕。ジョチ家との関係で言えば、繰り返すが、クドカ・ベキの子イナルチ（あるいはカダ附馬）にジョチの娘ゴイルカン（火雷公主）が嫁いだ。また『集史』によると、ジョチ家第6代当主モンケテムルと第

7代当主トデモンケ兄弟の母はトレルチ附馬の孫チュバン附馬とチンギス・カンの末子トルイの娘ノムガンとの間の子であった。さらに、ジョチ家左翼オルダ・ウルスではイナルチ附馬とゴイルカンの子オールドの子ニクパイとアク・テムルがジャライル部族の4個の千人隊を率いていた〔志茂 2013〕。ジョチ家にとってオイラト族長家は重要な婚姻相手であると同時に、ジョチ朝を構成する万人隊の統率者でもあった。

②ブリヤト

現在バイカル湖周辺に居住しているモンゴル語話者を指すブリヤトという名称が歴史上はじめて登場するのは『秘史』であるとされ、また、『集史』には出てこない〔村上訳注 1976 : 93-95〕。

『元史』巻 144 列伝 31 月魯帖木兒伝において、ユルクテムルはト領勤・多礼別台（ブリヤンキン・ドルベデイ）氏出身とあり、ブリヤト支族はドルベン部族を構成する支族の一つと考えられる〔村上訳注 1976 : 94〕。

『秘史』によると、ドルベン部族はオノン河流域のモンゴル部族の居住地より南東にいたようで、またもとは「森の民」であった〔秘史: § 16〕。一方、『集史』でドルベン部族はモンゴル部族の中の「純粹ニルウン」とよばれる人びとに分類されている。また、タイチウト支族と結んでチンギス・カンと戦ったことが強調される。

なお、ドルベン部族出身のドスカ率いる千人隊はトルイが継承した右翼の 12 番目に位置している〔川本 2013 : 83〕。

ドルベン部族やモンゴル部族のように、もともとタイガにいた「森の民」がモンゴル高原に南下して遊牧民となり、高原にいた集団が南や西に押し出されて中国やオアシス地帯に向かい、あるいは草原を通じてカザフスタンからバルカン半島やハンガリー平原にまで至るという一連の流れが内陸ユーラシアでは繰り返されていた。

③バルグ

『集史』において「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つとして挙げられるバルグト部族の人を表す接尾辞 *d* が

とれた形で表記されている。

バルグト部族は、コリ、トラス、トマトを含めた集団の名称で、バルグト、コリ、トラスはバイカル湖東岸一帯を指すバルグジン・トグム地方に住み、その西方にトマトの居住地はあり、キルギスの住地に近かったとされる。ただし、『集史』ではトマトもコリもバルグトとは別に列挙されている。これに対し、『秘史』ではコリトマトと一括りにしている。

『集史』には、「この（キュルリュウト。コルラウト）部族は、コンギラト、イルジギン、バルグト部族と互いに近く住んでおり、合体して一つになっている。タムガも一緒である。彼らは互いに親族であると主張し、婚姻関係を保っている。この三または四の部族は決してチンギス・カンと争わなかったのも、彼は彼らを分割して奴隷として人に与えたりしなかった」[川本 2013 : 46]とあり、モンゴル帝国で強大な権力をふるった姻族コンギラト部族とバルグト部族は一体化していたとされる。

④ウルスト

『集史』の「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つとして挙げられる「ウラスト」と同じだと考えられる。

通説では漢籍史料に出てくる烏思（オシ、ウス）のことだとされる[佐口他 1972]。しかしながら、現在のウス（オス）Ус 河はサヤノゴルスク市から南東方向にある、クラスノヤルスク地方西サヤン山脈北麓・エルガキ山脈南麓を流れており、トゥバ共和国と隣り合っている。おそらく、オシとは⑩コリトマトのことで、その中心地をケムケムジュート（欠欠州）と呼んだのであろう。

ウルストは現在のアルタイ共和国オングダイを流れるロシア語名ウルスル河（Урус ул、ウルス河、オロス河）流域の住民だと思われる。ウルスル河には契丹・西遼（ナイマン）時代のもつとされる大規模灌漑設備の遺跡があることから[三上 1957 : 331-332]、ウルストは農耕に従事していた可能性もある。なお、オングダイのオング Ongu とはモンゴル語で長城のことなので、アルタイ共和国に長城あるいは城塞があった名残かもしれない。

また、ウラズ（オラズ）という氏族は現在のカザフ人にもいて、彼らはジョチの民草とされたウルストの子孫とされる[村上訳注 1976 : 95]。

このウルストのように、河川名あるいは地名に、人を表す接尾辞 *d* や複数語尾 *s* をつけて集団名とする例が『秘史』には多く見られる。

⑤カブカナス

カブカナスの単数形「カプカン」は袋（ロシア語では袋状の罟）のことで、カブカナスはバイカル湖より西、エニセイ河源流域にある袋の形をした地形に住む人々を指す。なお、カプカンという単語はテュルク語なので、テュルク語系言語話者が当該地名を名付けたのであろう。

カブカナスについては『元史』に説明がある。

憾合納猶言布囊也、蓋口小腹巨、地形類此、因以為名。在烏斯東、謙河之源所從出也。其境上惟有二山口可出入、山水林樾、險阻為甚、野獸多而畜字少。貧民無恒産者、皆以樺皮作廬帳、以白鹿負其行裝、取鹿乳、采松実、及鬪山丹、芍薬等根為食。月亦乘木馬出獵。（『元史』、地理志 6、西北地附録）

（訳）

カプカンは布袋のことで、口が小さく袋の中が大きいというのがここの地形に似ており、こういう名になっている。オシの東、ケム河の源流域にある。その境は2か所だけ出入りが可能で、山、河、森に囲まれていてとても険阻であり、野獸は多いが家畜は少ない。貧しい民で恒産を持たない者で、みな樺の皮で家を作り、トナカイの後を追ってその乳を取り、松の実を採り、山丹、芍薬の根などを食べている。またそりに乗って出獵する。

【秘史：§ 47】に出てくるカプトルカスとこのカブカナスは同じで、『集史』ではスニト部族の一支族とあり【村上訳注 1976：95-96】、スニト部族は「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つである。

オシがケムケムジュート、現在のトゥバ共和国の首都クズル市周辺だとすれば、カプトルカスの地はトゥバ共和国東部のトーラヘム Тоора-Хем 一帯、アザス Азас 国立自然保護区だと思われる。

⑥カンガス

村上訳注 [1976 : 96-97] ではカンガスは康居族のことではないかと推測されているが、⑤カブカナスと同じく、地名に複数語尾を付けてその地域に住む人々の名としてとすれば、**Qangas = Qang + as** (複数語尾) であり、**Qang (= Кан)** はカン河のことで、現在のクラスノヤルスク地方カンスク市周辺に相当するカン河流域の住民を指すと考えられる。

現在、カンスク市の東にイランスキー (Иланский) 町がある。『元史』によると、益蘭はテュルク語のイラン **Yilan** すなわち蛇の意である (『元史』、志 15、地理 6。列伝 54 劉好礼伝)。益蘭州とはカン河流域、⑥カンガスの居住地であろう。

このカン河流域にはカマシン人が住んでいたが 20 世紀に消滅した。カマシン人の話すカマス語はサモエード語系言語で、また、カマシン人はタイガでトナカイ牧畜、狩猟、漁猟を行うタイガ・カマシンと、ステップで馬などの牧畜をするステップ・カマシンに分かれていた。

⑥カンガスがカマシン人のことだとすれば、サモエード語を 20 世紀まで保持していたことになり、また益蘭 (イラン) はテュルク語なので、益蘭州という地名はテュルク語話者が付け漢字を当てはめたのであろう⁵。元代満洲にあったビシュバリク (五国城) の場合と同じく、外来の支配者であるテュルク語話者がイランと名付けたとすれば、イランという地名は突厥・ウイグル・キルギスのようなモンゴル帝国期より前からあった可能性もある。

⑦トゥバス

クラスノヤルスク地方南部、トバ (**Tuba, Туба**) 河流域の住民を指す。現在のトバルル人 (**Tubalar**)。 **Tuba + s** (複数語尾) とすれば⑤カブカナスや⑥カンガスと同じ語の構造になっている。また、トバ河もカン河と同じく、ミヌシンスク盆地の北でエニセイ河と合流する。

5 満洲のビシュバリク (五国城) については中村 [2020] を参照。毛皮の産地でかつツングース系民族の地であるが、突厥時代にテュルク語の地名が付けられた可能性があると考えられる。エニセイ河上流域にも非テュルク語話者の地でありながらイラン (益蘭) のような地名があり、突厥・ソグド商人の毛皮交易路が満洲だけでなくエニセイ河上流域にも伸びていたとも推測できるだろう。

村上訳注 [1976:97-98] ではトゥバス (トバラル人)、トゥカス (トファラル人)、トマト (トゥバ人) を同じ部族と見なしているが、以下で見るように別の集団だと思われる。

⑧キルギス

現在の天山山脈にあるキルギス共和国のキルギス人との関係はわかっていない。

『秘史』では「万のキルギス」と呼ばれ [秘史：§ 239]、複数の部族に分かれていた。『集史』では「荒野に住む人びと (遊牧民) の集団であり」、「より最近になってモンゴルとよばれるようになった諸部族」の一つとされる [川本 2013：40]。ハカス共和国・ミヌシンスク盆地を中心とするエニセイ河上流域に住み、牧畜や農耕などに従事し、鉄の生産も重要だったと考えられている [白石 2017]。現在のハカス共和国の西隣のケメロヴォ州にはテュルク系のショル人が住んでいて、以前はクズネツキー・タタール (鍛冶屋タタール) と呼ばれており、製鉄・冶金の技能集団がいた名残がある。『元史』、地理志にはキルギスは 9,000 戸だとある。

すでに述べたように、1218 年のモンゴル軍の侵攻により再征服されたが、キルギス部族出身で著名な人は知られていない。ミヌシンスク盆地は主にトルイの末子アリクボコの権益とされたようである。

ミヌシンスク盆地を含めたアルタイ山脈やサヤン山脈周辺地域は、遊牧や狩猟に加え、大規模な灌漑施設があった農耕地帯であり、西遼やナイマンの統治に引き続き、モンゴル帝国時代も漢人や中央アジアからの移民が送りこまれるなど、農業生産の維持が図られた。しかしながら、13 世紀以降、大方の傾向として農業は衰退していったと考えられ、元朝は貧窮したキルギス部族をカラコルム、遼陽 (満洲)、大都 (現在の北京)、山東などに移した。

13 世紀末、カラコルムにキルギス (乞児乞思) 戸がいて (『元史』、世祖本紀 12、夏 4 月己巳)、1286 年のカイドゥ軍の侵攻時にはカラコルムに屯しているキルギス軍が北方に派遣されている (『元史』、世祖本紀 12、秋 7 月辛卯)。元朝とカイドゥとの対立時にアルタイ山脈、サヤン山脈、ミヌシンスク盆地のような北方からカラコルム周辺の広範囲にわたる地域が戦場になっていた。「森の民」

も元朝・クビライ派とカイドゥ王国・メリク・テムル派に分かれて戦っていたのである。

なお、16世紀には当該地域の人びとは農耕を完全に放棄していた〔三上1957：336〕。

⑨シビル

現在のシベリア **Сибирь** の語源となった言葉である。イスラーム圏の史料ではイビル・シビルなど、シビル単独ではあまり表れない。シビル（カシリク、イスケルとも言う）という町はモンゴル帝国時代以前からあった。シビルはハザールを含むサビルという部族集団に由来するとの説があり、サビルはすでに6世紀にはビザンツ帝国の歴史家によって記録されている〔護・岡田編著1990：156-157〕。西シベリアにはハンテ人やマンシ人といったマジヤル語（ハンガリー語）の近縁のウラル語系話者や、シベリア・タタール人のようなテュルク語話者化した先住民が現存している。

ジョチ朝期にはトボル河とイルティシュ河の合流地点周辺に都市が建設され、なかでもトゥラ河畔に建てられた中心都市チンギ・トゥラはチュメン（万の意。ロシア語ではチュメニと発音される）とも呼ばれた。すなわち、西シベリアには万人隊が設置され、この中心地自体が万と呼称されたのである。ジョチ朝期にテュルク化・イスラーム化が進むが、都市に造幣所が置かれることはなかった。

14世紀後半にはチュメンにおいてケレイト部族が勢力を持ち、シバン家（ジョチ裔）出身のイバクを迎え入れ、シビル国（シビル汗国）が作られた。

シビル国は16世紀末にモスクワ大公国に滅ぼされたが、滅ぼされる前はモスクワに毛皮を貢いだり取りやめたりというのを繰り返していた。このシビル国自体がオビ河流域のコダ（ハンテ人・マンシ人）やペガヤ・オルダ **Пегая Орда** のような集団（セリクープ人やケット人にあたるとされる）から毛皮を取り立てていた。ジョチ朝・シビル国時代のチュメンは毛皮の集積地、交易拠点として栄えていたと考えられる。

⑩ケステイム

オビ河上中流域からエニセイ河中流域に住んでいたケステミ人・ケット人のこ

とであろう。テュルク語系でもなくサモエド語系でもない、エニセイ語系言語話者の集団である。エニセイ語は北米のナヴァホ語との近縁関係が指摘されている、ユーラシアでは珍しい言語である [Vajda2004]。

『集史』には、「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つとして登場し、イスラーム世界でも古くから記録が残っている。中国では唐代から知られていた。

すでに述べたように、『聖武親征録』には火因亦児干(ホイン・イルゲン)として、烏思(オシ)、⑤憾哈納思(カプカナス)、⑬帖良兀(テレングト)、⑩克失的迷(ケステミ)の4部族が挙がっている [宇野 1985]。

⑪ バイト

現在エネツ人のサブエスニシティとされる「ペーバイ(森のバイ)」あるいは「バイ」と自称する集団で、一年中森の中で生活する、サモエド語話者のトナカイ狩猟民である [護・岡田編著 1990 : 442]。現在エネツ人は主にエニセイ河口東岸に居住している。

バイトはバイにモンゴル語の人を表す接尾辞 *d* が付いたものである。モンゴル高原のウブサ湖東岸には現在もバイトが遊牧している [村上訳注 1976 : 101]。また、ウズベク人を構成する氏族にバイ、カザフ人の小ジュズにもバイラル (*lar* ラルはテュルク語の複数語尾) がいる [Howorth 1880/2008 : 12]。つまり、バイトはジョーチ朝の構成部族であり、バイトの子孫はシベリア、モンゴル、ウズベキスタン、カザフスタンに分かれて住んでいることになる。

⑫ トゥカス

トゥカス *Toqas* は、本来モンゴル語にない *f* 音の代わりに *q* 音を使ったとすればトファス *Tofas* となり、トファ河の住民を指すことになる [村上訳注 1976 : 97-98]。現在トファ人(トファラル *Tofalar*) はイルクーツク州南西部のクラスノヤルスク地方やトゥバ共和国と接する地域(トファランド)に住んでいるが、アルタイ人の北部方言を構成する集団の中にもトファラルが現存する。元来カラガス人というサモエド語系言語話者だった集団がテュルク化し、トファラルと名乗るようになったとされる。

⑬テンレク（テレグ）

現在のアルタイ人の南部方言集団の一つであるテレングトの不完全音写 [村上訳注 1976 : 101]。現在のアルタイ人はソ連政府によって作られた民族で、北部方言のトファラル、チュルカン、クマンディン、南部方言のアルタイ・キジ、テレングト、テレス、テレウトといったサブエスニシティから構成されている [護・岡田編著 1990 : 248-252]。『集史』には、「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つとして登場する。

⑭トエロス（トエレス）

現在のアルタイ人の南部方言集団の一つであるテレスの不完全音写 [村上訳注 1976 : 101-102]。やはり『集史』において、「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」の一つとされる。

チンギス・カンはバアリン部族のゴルチ・ノヤンを長とするバアリン千人隊1個に加え、タガイ・バートルの1個とアシグの1個、アダルキン部族のチノス氏族、⑬テレングト、⑭テレスを合わせて「森の民」万人隊を編成し [秘史 : § 207]、アルタイ山麓、イルティシュ河上流域を遊牧地として与えた。

トルイの継承した中軍の右翼 15 番目にゴルチ・ノヤンの 10 個の千人隊があり [川本 2013 : 83]、このバアリン万人隊はトルイ家、そして第 4 代憲宗モンケ・カアン一族の中核軍団をなした [村岡 1996]。

⑮タス

タズ河流域に住む「森の民」のことで、本来モンゴル語には z がないので s で代用したと考えられる [村上訳注 1976 : 102]。現在タズ河流域・エニセイ河中流域にはセリクープ人が住んでいる。セリクープ人はエニセイ語からサモエード語に母語が変わった集団だとされ、またエニセイ語話者のケット人（ケチ河流域のエニセイ語話者）と生活習慣がよく似ている。

ケット人やセリクープ人はトナカイを飼育し、ワシを含めた鳥を生け捕りにして調教し、木をくり貫いてカヌーを作る。また、ケット人は時々、三板に似たボート・ハウスに住んだ [フォーシス 1998 : 37-38]。なお、現在のシベリアでも夏の移動手段は船で、日本製の船外機がよく売れる。

現在もカザフ人の中にタスという氏族がいるということから [村上訳注 1976 : 102]、ジョチ家に分与されたタス部族がいたものと思われる。

⑩バジギト

現在はウラル山脈南麓に居住するテュルク語系言語話者で、バシコルトと自称する。10世紀頃にはウラル河とエムバ河の間に住んでいたが [イブン・ファドラーン 2009 : 129-132]、13世紀にはヴォルガ・ブルガール国に隣接する地域にまで北上していた。13世紀前半までマジャル語（ハンガリー語）が通用していたが、徐々にテュルク語化されていった。西欧では「大ハンガリー」と呼ばれた [護訳注 1979 : 191-192]。

⑪コリトマト

『集史』ではコリとトマトという2つの部族として、「現在モンゴルとよばれているがもとの名前はモンゴルではなかった諸部族」に含まれている。また、漢籍史料にはコリトマト（火裏禿麻）には元朝の官有牧場があると書かれている（『元史』、志 48、兵 3）。

エニセイ河上流域のサヤン山脈に住んでいたトマト（Tumad）が現在当該地域に住んでいるトゥバ人（Тува, Тыва）だとすれば、元朝時代と変わらずウイグル語に近いテュルク語系言語を母語として保持し続けていることになる。

トゥバ共和国クズル市を中心とする大エニセイ河（トゥバ語でビーヘム。同時代史料に現れるケム、謙河のこと）と小エニセイ河（ケムジュート）の合流点一帯に広がるステップはケムケムジュート（謙謙州、欠欠州）と呼ばれ、この地がオシ、⑪コリトマトの居住地であろう。なお、唐代には餓支（烏思）、弥列哥（メルキト）および都播（トゥバ）の3部族は合わせて木馬突厥と呼ばれていた [佐口他 1972 : 453]。12世紀末から13世紀初頭時点では、オシとトゥバは原住地にとどまっており、メルキトはすでにモンゴル高原に南下していた。

13世紀後半について見ると、世祖クビライは即位するとコンコダン部族の伯八（ババ）を万戸として諸部軍馬を束ねさせてケムケムジュート（欠欠州）に置いた（『元史』、卷 193、忠義伝附伯八伝）。「森の民」諸部の司令官となったババは「シリギの乱」の発生をクビライにいち早く知らせた後、反乱軍に殺された。

ババを除くコンコダン部族の大部分はアrikボコの末子メリク・テムルが継承しており、メリク・テムルはシリギ、その後カイドウの勢力に加わっていた[村岡1996]。「森の民」をめぐるクビライとアrikボコ家は激しく対立していたのである。

3. 『秘史』にない集団・アンガラ

『秘史』には、漢籍史料には現れる昂可刺がない。『元史』地理志6西北地附録には、大都から25,000余里のところ、キルギスの附庸である昂可刺(アンガラ河の住民)がいて、キルギスとは言語が異なり、唐代の骨利幹(クリカン)のことで、昼が長く夜が短い、すなわち北極圏もしくはそれに近いところに住んでいるとの記事がある。

また、アンガラ河流域については『集史』I写本「タタル部族史」に以下の記事がある。

「次のように言われている。かつて、タタル、ドルバン、サルジウト、カタキンの諸部族がともに集って、皆で、ある川々の下流に住んでいた。(こうした川が)合流してアンクラ・ムラン河となる。非常に大きな河であり、そこにはモンゴルの一部族が住んでおり、彼らのことをウスト・マンクンと呼んでいる。この地方は現在(ウスト・マンクンに)属している。その河はキカスという名の町の近くを流れており、その地でこの河とカマル河が合流している。その町はキルギス地方にある。

また、次のように言われている。この河は、その近くに湖がある地方を流れており、(そこでは)すべてが銀(といえるほど銀があふれていた)。その地方の名はDarabat, Alafjin, Adutan, Mankku, Balaurunan(ダラーバト、アラーフジーン、アードウターン、マンクー、バラウールナーン)である。

また、次のように言われている。彼等の馬はすべて赤茶(ala)であり、どの馬も四歳駱駝のように肥えている。また、彼等の道具や容器はすべて銀でできている。そして鳥が多い。ソルカクタニ・ベキはクジュクル部族のナクリク、カラヌト部族のバクジュ、(空白)部族のモンクル・ジトナという

3人のアミール（部将）を一千の兵と共に船で派遣した。多量の銀を川岸まで運んだ。

しかし、船に積みこむことはできなかった。派遣軍の兵士達は300人以上がもどってこなかった。残りの者達は腐敗した空気と極度の湿気のために命を落とした。3人の部将はそれぞれ無事に帰還し、長寿を保った。」[志茂 2013 : 469-471]

ウスト・マンクンはアンガラ河本流にマンクン河が合流する地点を意味する。カマル河がエニセイ河本流だとすると、アンガラ河がエニセイ河に合流する地点には現在エニセイスクなどの町があり、エニセイスクはロシアによる東シベリア統治の拠点の一つだった所であり、キカスもこの近くにあったのだろう。エニセイ・アンガラ合流域の先住民はケステミ人やケット人のようなエニセイ語話者であり、おそらくクリカンとはエニセイ語話者のことだと思われる。なお現在、マンクン川というのは地図には見られないが、エニセイ・アンガラ合流点から東にアンガラ河をさかのぼった所にタタルカ河とタタルカという村が現存している。

銀鉱山がないのに銀や銀製品が蓄えられ、良馬が多いなど豊かであり、また、鳥、おそらく猛禽類が沢山飼われていた。腐敗した空気と極度の湿気というのは、シベリア奥地の夏は酷暑で湿度が高く、蚊が大発生するという気候を描写したものである。1,000人の兵士のうち300人以上が戻ってこなかったというのは、通常、部隊の3分の1が死傷すればその部隊は機能不全に陥るのであるから、本作戦が失敗し遠征部隊が壊滅したことを表している。この記事は伝聞だが非常に信ぴょう性の高い内容で、フレグの母ソルコクタニ・ベキの強欲な一面を表したこの記事は後の写本では削られたとされる[志茂 2013]。

『秘史』には「森の民」からの貢物として毛皮、馬、猛禽類が記されているが、これらに加え、軍・民草と銀の供給も重要だったと考えられる。

4. 元朝およびジョチ朝との関係

『秘史』に挙げられた「森の民」の名称が基本的には地名や河川名によって決められているとし、現在のロシアの地図に載っている地名および河川名もモンゴ

ル帝国期とあまり変化がないと仮定して、モンゴル帝国期における「森の民」の居住地についてまとめると、以下ようになる。

- ①オイラト…オイラト（トルグト、カルムイク）人。バイカル湖南岸～トゥバ共和国。
- ②ブリヤト…ブリヤト人。ドルベト部族の中の一支部。バイカル湖岸。
- ③バルグ…バルグト部族。バイカル湖東岸。
- ④ウルスト…アルタイ共和国ウルスル（ウルス）河流域。
- ⑤カブカナス…トゥバ共和国東部。撼合納。
- ⑥カンガス…カマシン人（現在は消滅）。クラスノヤルスク地方カン河流域。益蘭州。
- ⑦トゥバス…トバラル人。クラスノヤルスク地方トバ河流域。
- ⑧キルギス…ハカス人、ショル人。クラスノヤルスク市～ハカス共和国およびケメロヴォ州。吉利吉思。
- ⑨シビル…ハンテ人、マンシ人、シベリア・タタール人。チュメニ州（イルティシュ河・トボル河合流域）。
- ⑩ケスディイム…ケステミ人・ケット人（エニセイ語系）。オビ河上中流域・エニセイ河中流域。
- ⑪バイト…エネツ人。エニセイ河口東岸。
- ⑫トゥカス…トファラル人（テュルク化したカラガス人）。イルクーツク州南西部トファ河流域およびアルタイ共和国北部。
- ⑬テンレク（テレグ）…テレングト人。アルタイ共和国南部。
- ⑭トエロス（トエレス）…テレス人。アルタイ共和国南部
- ⑮タス…セリクープ人。タズ河流域・エニセイ河中流域。
- ⑯バジギト…バシコルト（バシキル）人。バシコルトスタン共和国。
- ⑰コリトマト…トゥバ人。トゥバ共和国。

この17集団は『秘史』では、①～⑦、⑧、⑨～⑯、⑰の4つに分けて記述されている。これらの部族すべてを1207年にジョチが従わせたとは思えないが、元朝で「森の民」として記録していたものであろう。

まず、⑧キルギスや元朝の官営牧場のある⑰コリトマトは元朝政府にとってよく知られた土地だと考えられる。また、①～⑦もトルイ家、元朝との関係が深い集団である。①オイラトはチンギス・カン家の姻族であり、③バルグは姻族コンギラト部族と密接な関係がある。⑤カブカナス（撼合納）、⑥カンガス（益蘭州）は直接統治の対象地域である。クビライはアrikボコー族が権益を有するエニセイ河上流域に自身の配下であるコンコダン部族のババや漢人官僚を送り込んでおり、メリク・テムルがシリギヤカイドゥ側について反抗したのはこうした権益への侵害に対する異議申し立てだったと思われる。なお、⑦トバルル人と元朝との関係は不明だが、地理上、⑧キルギスと隣接している。また、④ウルストだけは現アルタイ共和国にいた部族だが、①～⑦の中に含まれている。

残りを見ると、⑬テレングト人と⑭テレス人はモンケ・カアン一族の基幹軍団であるバアリン万人隊の構成部族であり、トルイ家とは深い関係にあると思われるが、元朝とのつながりは明らかではない。また、⑨シビルと⑯バジギトはジョチ朝の一部であり、元朝との関係はあまりなかった。さらに、⑩ケステミ人・ケット人はオビ河上中流域に住んでいることから⑨シビルのような西方との結びつきが強かったと思われる。

まとめると、①～⑧および⑰は『秘史』が成立した14世紀前半の元朝〔岡田1985〕にとって重要な「森の民」であるが、⑨～⑯は記録にはあるが統治できていなかったと考えられる。

ジョチ朝から見ると、そもそも⑨シビルと⑯バジギトはジョチ朝の一部であり、④ウルスト、⑪バイトおよび⑮タスは現在のカザフ人を構成する氏族であり、ジョチ朝に軍を供出していた。

エニセイ河中下流域はジョチ朝の影響下にあり、この地域の人々はミヌシンスク盆地という上流域ではなく、オビ河でシビルそして毛皮の需要地とつながっていたと考えられる。

5. 北極圏をも版図としたジョチ朝

『秘史』に登場する「森の民」の中には、④ウルスト、⑥カンガス、⑦トゥバス、⑫トゥカス、⑮タスのように集団名がその居住する河川名によるものがあり、モ

ンゴル高原と同じく、チョルゲ（漢語では路）という流域ごとに集団を把握するという統治手法が採られていたことがわかる。モンゴル高原におけるチョルゲはその集団の遊牧の範囲であると同時に、ジャム（駅）の担当範囲を示すものでもあった。シベリアでは夏は舟、冬は凍った河の上を馬や犬橇などで移動することになり、モンゴル高原と同じく、河川ごとに⁶ 牧畜や農耕の範囲だけでなく、狗站や水站などを負担する単位があったと思われる。

また、サモエド語話者であるカマシン人の地をテュルク語でイラン（益蘭）と呼び、カラガス人をトゥカス（トファラル）と表記するなど、地名をテュルク語で表しており、シベリア統治においてリングフランカ（族際共通語）、あるいは行政用にテュルク語が使われていたか、もしくはサモエド語話者のテュルク語への移行が見られる。こうしたテュルク語の地名はモンゴル帝国以前から使われていた可能性もある。

さらに、エニセイ河中流から下流域の㊶タス（セリクープ人）や㊷バイト（エネツ人）はカザフ人やウズベク人を構成する氏族でありジョチ朝との関係が深い。おそらくジョチ朝・シビル国の影響はエニセイ河中下流域にまで及んでおり、のちにロシアはシビル国が利用してきたイルティシュ、オビ、エニセイ河流域の既存の河川網を伝って侵略し、各地でヤサク（毛皮税）を取り立てることができたと考えられる。

現在、参考書や資料集に載せられたモンゴル帝国の版図を表す地図では、元朝やジョチ朝の範囲がシベリアの真ん中あたりまでとなっているものが多い。しかしながら、『秘史』の記述を前提とするならば、14世紀第1四半期の元朝の版図はエニセイ河とアンガラ河の合流域より南までで、西シベリアおよびエニセイ河口域にいたる北極圏はジョチ朝の版図といっていだらう。

残された課題についてであるが、「森の民」万人隊・バアリン10個を構成する現在のアルタイ共和国の諸部族については、『集史』には一応挙げられている

6 マルコ・ポーロ『東方見聞録』には、北方の地のコンチ（コニチ）王（ジョチ朝オルダ・ウルス第4代当主）の国について述べる箇所、一日行程ごとに宿駅があって40頭の大きな犬がいて、馬車の通れないところは御者のいない6頭の犬をつないだ橇で移動すること、クロテンやオコジョなど高価な毛皮の産地であること、住民は狩りが上手いことなどの記録がある【高田訳注2013：586-588】。満洲では4匹の犬に橇を引かせていた【中村2020：86-87】。

が、『秘史』では不完全音写され、漢籍史料にはほとんど登場しないというように、モンケ・カアンの子孫が基盤としていたはずの集団について元朝はあまり把握できていなかった。旧ソ連ではアルタイ共和国一帯はジョチ家の領土だったとされるが、根拠が明らかでない。アルタイ共和国に当たる地域がロシアに編入されるのは、地元の首長たちがジュンガルではなくロシアへの服属を決めた18世紀に入ってからで、ケメロヴォ、トムスク、クラスノヤルスク方面がロシア領となった時期よりも200年も遅かったのであり、アルタイ共和国とより北方の森林地帯との関係は希薄だったと言えるだろう。モンゴル帝国時代のアルタイ共和国の部族と元朝・ジョチ朝との関係について考えていきたい。

また、『秘史』にはテュルク語、サモエード語、エニセイ語話者は登場するが、エベン人やエベンキ人のようなツングース語話者は見えない。満洲のツングース系は水達達（ス・モンゴル）として、特殊だがモンゴルの一部と見なされていた。13～14世紀にクラスノヤルスク地方中央部にツングース語話者の集団はいなかったのだろうか。あるいはモンゴル・タタルの中の部族と認識されていたのだろうか。今後の課題としたい。

参考文献

史料

『元史』：中華書局点校本。

『元朝秘史』：村上訳注 [1970-1976]。小澤訳 [1997]。

『集史』：Рашид-ад-дин, “СБОРНИК ЛЕТОПИСЕЙ(ДЖАМИ АТ-ТАВАРИХ”, (http://www.vostlit.info/Texts/rus16/Rasidaddin_2/)。川本 [2013]。志茂 [2013]。

『ヴォルガ・ブルガール旅行記』：イブン・ファドラーン（家島彦一訳注） [2009]

『ヴォルガ・ブルガール旅行記』、東洋文庫 789、平凡社。

『東方見聞録』：高田英樹訳 [2013] 『マルコ・ポーロ、ルスティケッロ・ダ・ピーサ世界の記：「東方見聞録」対校訳』、名古屋大学出版会。

地図

Красноярский край, Республика Хакасия, атлас-путеводитель для автомобилистов и туристов, рыболовов и охотников, ООО ИД Знаки времени К, №4(44), 2007г.

引用文献

- 宇野伸浩 [1985] 「ホイン・イルゲン考：モンゴル帝国・元朝期の森林諸部族」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、別冊 12、哲学・史学編。
- 岡田英弘 [1974] 「ドルベン・オイラトの起源」『史学雑誌』、83 (6)。
- 岡田英弘 [1985] 「元朝秘史の成立」『東洋学報』、66 (1～4)。
- 小澤重男訳 [1997] 『元朝秘史』、上下、岩波文庫。
- 川本正知 [2013] 『モンゴル帝国の軍隊と戦争』、山川出版社。
- 佐口透・山田信夫・護雅夫編 [1972] 『騎馬民族史 2: 正史北狄伝』、東洋文庫、平凡社。
- 佐々木路子 [2019] 『ロシアの地理的「探検」と「発見」』、之潮。
- 志茂碩敏 [2013] 『モンゴル帝国史研究正篇：中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』、東京大学出版会。
- 白石典之 [2017] 『モンゴル帝国誕生：チンギス・カンの都を掘る』、講談社選書メチエ 652。
- 田辺三千広 [2011] 「西シベリアへの進出」、中京大学社会科学研究所ロシア研究部会編 [2011] 『ロシアのシベリア進出史』、3章、成文堂。
- ドーソン、C. (田中萃一郎訳補) [1937] 『蒙古史』、上巻、岩波文庫。
- 中村和之 [2020] 「『混一図』に描かれた北東アジア」、村岡倫編著 [2020] 『最古の世界地図を読む：『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海』、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 16、法蔵館。
- フォーシス・ジェームス [1998] 『シベリア先住民の歴史：ロシアの北方アジア植民地』、彩流社 (Forsyth, J.[1992]A History of the Peoples of Siberia, Cambridge University Press.)。
- 松田孝一 [2015] 「チンギス・カンの国づくり」、白石典之編著 [2015] 『チンギス・カンとその時代』、勉誠出版。
- 村岡倫 [1996] 「トルイ＝ウルスとモンゴリアの遊牧諸集団」『竜谷史壇』、105。

村上訳注 [1970-1976] 『モンゴル秘史：チンギス・カン物語』 1～3、東洋文庫、平凡社。

三上正利 [1957] 「ロシア人以前の西シベリア開拓：南部諸民族の農耕」『人文地理』、9(5)。

護雅夫・岡田英弘編著 [1990] 『中央ユーラシアの歴史』、民族の世界史 4、山川出版社。

森永貴子 [2008] 『ロシアの拡大と毛皮交易：16～19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』、彩流社。

安田公男 [2017] 「『金史』に現れる人物「障葛」について」、『13－14世紀モンゴル史研究』、(2)。

Howorth, H.H.[1880/2008]History of the Mongols from the 9th to the 19th Century, Part2, The So-Called Tartars of Russia and Central Asia, Cosimo Classics, NY.

Vajda, E.[2004]Ket. Languages of the World(Munich : Lincom Europa).